

画文集 Photo Essay

2010年

旅の空の下で V



広州動物園にて 大熊貓

[アメリカ・カナダの旅 10 までについては、](#)



アメリカ・カナダの旅 11 南紀編

和歌山県美浜町三尾

2006年夏7月、アメリカ・カナダへの旅から帰国後一月、今度は羽田から関空に飛びそこから車で和歌山県をめざした。高速道路を御坊市で降り、東西に長い青松の海岸「煙樹(えんじゅ)ヶ浜」を西に向かう。平野が途切れ山が迫る海岸線を縫うように、町の西端近く三尾を訪ねた。通称「アメリカ村」で知られる集落だ。

この土地からは戦前、大勢のカナダ移民が出、ヴァンクーヴァー近郊のスティヴストンにその多くが住んだ。そこに「三尾村人会」をつくり助け合って暮らした。日本の敗戦により帰国した者もいたが、戦後もカナダに留まる者も多く、現在日系カナダ人の約1割が三尾の出身だという。ところで当時の紀州人には、アメリカ西海岸もカナダのそれも大して違わぬ所と映っていた。そのために通称「アメリカ村」と呼ばれるようになったと言う。

それにしても、港を囲みわずかに平野があるだけの土地だ。背後は山ばかりである。住民が遠く海外に出て行ったのも、不思議ではない気がした。

[2006年度『旅の空の下で』を参照。](#)



アメリカ・カナダの旅 12 南紀編

日ノ岬の沖

三尾からさらに先は、紀州の海に突き出た日の岬があるだけだ。ここも山がちで、車は山道を上がり岬の公園に至る。山頂には移民資料館があって、その見学はカナダ旅行の復習となった。ご覧のとおり、日加両国の国旗がはためいていた。

日の岬の沖合いは好漁場として知られ、それは江戸時代から数度の漁場争いを引き起こした。そして明治27(1894)年から1年半に及ぶ、大阪の和泉打瀬網(うたせあみ)船との魚場争いに破れた時、三尾の漁業は壊滅的な打撃を受けたという。

折りしも、この三尾出身の工野儀兵衛氏がカナダのスティヴストンに渡り、鮭漁で開拓の実をあげ、同郷の者呼び寄せ始めた頃と重なった。三尾の人々の中で、はるかカナダまで出かけフレーザー河での鮭漁にかけようとする者が出て来た。初めは年季奉公のつもりで、やがて彼の地に定着する人が増えて行く。

1900年、「カナダ三尾村人会」の会員は150名に、それが戦前の終わりには500名近くに達したと言う。



アメリカ・カナダの旅 13 南紀編

カナダ移民資料館で

写真の野田秀(すぐる)さんは、ここに来る前、美浜町役場の教育委員会で紹介してもらった元教育長。戦前に移民の子としてカナダで生まれ、8歳の時に帰国して以来、この地で暮らしてきた。自身が覚えのあるカナダ仕込のポストンバックの前で、カメラに収まってもらった。

野田さんは1923年、ブリティッシュ・コロンビア州の内陸、ケローナ(Kelowna)市で生まれた。両親のカナダ行きのきっかけは、ヴァンクーヴァーで成功したおじが呼び寄せたことからだった。しかし生後まもなくの冬、父が杉の巨木の下にいた時、ドスンと落ちてきた雪に埋まり、悲運にも亡くなった。そこから野田さんの数奇な運命は始まる。

一家は間もなくヴァンクーヴァーに戻り、母は再婚。日系人街のパウエル通りで暮らした。新夫は、やはりスティヴストンで鮭漁をしていた同郷の移民だった。おそらくぎくしゃくした家族関係になったのだろう。野田さんは母と別れ31年に兄姉と一緒に帰国することになった。



アメリカ・カナダの旅 14 南紀編

カナダ帰りの人の家

野田さんが和歌山で暮らした家は、母の姉の家で、しかも兄姉とは別れての孤独な生活だった。大学生の時、戦争が悪化すると招集され、満州に二年間駐屯する身になったと言う。さらに45年の敗戦の時、ソヴィエト兵に降伏。部隊もろとも遠くソ連アゼルバイジャン州のバクーに抑留され、3年の捕虜生活を余儀なくされた。真の苦労人と言える。

戦後の野田さんは、在籍していた大阪市立大学商学部をようやく卒業し、その後、発音が良いことを活かしたらと中学校の英語講師の口を得た。以来30年近く、中学校の教員畑を歩き、最後は校長として定年を迎えた。しかし請われて四年程、町の教育長も勤めたという。

野田さんの話には、生まれ育ったカナダへの望郷の念がにじんでいた。幼い頃の実母との生活も忘れがたいのだろう。戦後兄は再びカナダに渡ったと言う。そして野田さんは、カナダ時代を忘れないために、この和洋折衷の洋館を三尾に購入した。この家を大切にしている。



アメリカ・カナダの旅 15 南紀編

クヌッセン機関長の胸像

日の岬にはもう一つ、海外との接点と言ってよいエピソードがある。

胸像のような精悍な顔つきの人だったのか、ヨハネス＝クヌッセン(Knudsen)氏は、ここ日の岬の沖で帰らぬ人となった。

1957年2月10日夜、沖合いは風速20mを越す強風下にあった。そこで徳島県浅川港所属の木材運搬船「高砂丸」が、火災に見舞われた。通りかかったのが、神戸へ向かうデンマークの輸送船エレン・マースク(Maersk)号だった。燃える「高砂丸」に生存者を見て、マースク号は救難艇を出した。しかし自船まで強風に流される始末。今度は最後に残った生存者が、投げられた綱を頼りに近づきマースク号の網梯子に取り付く。それを引き揚げた時、後一步で海に没したと言う。

次の瞬間、機関長のクヌッセン氏が救命ベルトをつけて荒れ狂う海に飛び込み、必死に救命ブイを投げた。再度救命艇も出されたが、そのエンジンが大波で故障する中、二人の影は夜の海に消えてしまった。翌朝、その遺体は救命艇とともに、岬近くの田杭の浜に打ち上げられた。



アメリカ・カナダの旅 16 南紀編

田杭の浜から岬を望む

好天が戻った翌朝、岬の北側、田杭の浜は大騒ぎになっていた。

昨夜の苦闘を物語る機関長のライフジャケットや、胴体に大きな裂け目のある救命艇の姿は痛々しかった。駆けつけた警察官に、マースク号が「高砂丸」の乗組員救出に力を尽くしたこと、機関長も犠牲になったと報告されると、その遺体に住民から、「あの海に飛び込んで日本人を助けようとしたのか」と驚きの声が上がった。

以来、この勇敢なデンマーク人を顕彰する動きは続き、62年には先の胸像が関西デンマーク協会の手で建立され、2002年のWC日韓共催大会の際には、和歌山でデンマーク選手のプレキャンプが行われた。

クヌッセン氏の故郷は、ユトランド半島北端近くのフレゼリクスハウン(Frederikshavn)にある。06年その郷土館に氏を記念するコーナーが設けられた。

同じ人間を助けるために運悪く自らも命を落とすことになった。この死に意味はあるのか。しかし、その死を惜しむ人は、クヌッセン氏の善意と勇気を永遠に忘れないだろう。



2009年春 ロンドン 1

ノーフォーク広場

昨春、家族でロンドンに旅行した。名探偵コナンにはまった娘がシャーロックホームズのロンドンに行きたがり、安宿に連泊する1週間弱の旅を計画した。

ロンドンでの滞在先がこのノーフォーク広場(Norfolk Square)に面するホテルだった。ここ7年で二度ほどロンドンに出かけている。前回もこの広場に面するホテルにした。その理由は抜群のロケーションと緑濃い環境とにある。まず空港のヒースローから、連絡鉄道が最寄りのパディントン駅まで数年前に開通した。俄然便利になった。駅からはわずかに100メートル程でこの入口に立てる。

駅は下町の殺風景な所にあり、バス通りは狭い割に往来があり騒々しい。ところが一步入ったこの広場はあくまでも静かだ。春3月末では、木々に緑は戻って来ていない。しかし夏に出かけた前回、大樹が広場を覆いとでも気持ちが良かった。朝から夕刻まで、市民に開放されている。区(City of Westminster)の職員が毎朝の清掃を欠かさない。その人と顔なじみになってしまった。ここはお奨めだ。



2009年春 ロンドン 2

大英博物館の中庭

世界でも最も有名な博物館、大英博物館(British Museum)は1997年に、その装いを新たにした。その改築の中心となったのが、この写真がその一部を表す四角な中庭とその真ん中、円形の旧図書館だ。

博物館には初め、この四角の中庭しかなかった。150年前、そこに円形の大英図書館が造られた。当時の写真を見ると、豪壮な吹き抜けの閲覧室が備わっていたことがわかる。そこに明治の文豪夏目漱石も通い、あのカール=マルクスも『資本論』という大部の書を書くため三十年近く通った。しかし増える蔵書を収めきれず、大英図書館が近くの新館に引っ越すと、ここも博物館の展示と利用者のための施設として公開されることになった。

中庭は大胆にもガラスの屋根で覆われ、屋内に取り込まれた。屋根は網状の鉄枠で支えられ、そこに数千枚のガラスがコンピュータで設計され、はめられている。一つとして同じでないそうだ。本来外であった空間は、休憩場所となっている。しゃれたミュージアム・ショップが円形の建物の1階を取り囲んでいた。



2009年春 ロンドン 3

列車の中で

明日は帰国と言う日にロンドンを離れ、列車で郊外のケンブリッジ (Cambridge) を訪ねた。車内に、歴史を振り返る興味深いポスターが張ってあるのに気づいた。

今を去ること約百年、イギリスとヨーロッパは第1次世界大戦に突入していた。早い終結の見通しは立たず、ロンドンでも多くの勤労者がヨーロッパの戦場に借り出された。ポスターの写真は、ベルギーのイーブル (Ypres) 行きの切符である。ロンドン交通博物館の宣伝として、セピア色の切符にまつわる話を書いてある。

「数百台ものロンドンバスが、フランスやベルギーの戦場に部隊を輸送した。しばしばそのバスの運転手がハンドルを握って。悲しいかな乗客の多くにとって、それは最後のバス旅行だった。男たちを送り出した街では、女性が車掌になって交代した。新しい博物館へ是非ようこそ」

イーブルは大戦中、敵のドイツ軍が初めて毒ガスを使用した戦場だった。中には、そんな悲劇の末路をたどった兵士もいたのだろうか。こんな所にも、イギリスは歴史の国だなあと感じる。



2009年春 ロンドン 4

クレーター・カレッジの庭

春の見事に晴れ上がった日、ケンブリッジの街を歩いた。お目当てはカレッジと呼ぶ古くからの学生寮を含む校舎建築だった。中でもキングズ・カレッジ (Kings College) は、歴史と伝統に彩られ有名だ。ところが一部工事中で良い写真がとれない。隣に、キングズと同様に古いこのクレーター (clare) カレッジが開いていた。

見事な正方形に近い芝生と石畳の中庭 (court yard)。刈り込まれた芝生が見事だ。カレッジが中庭を囲むのは、おそらく中世の修道院の影響だろう。修道僧はその中庭を囲む廊下を歩きながら、神の教えへの思いをめぐらした。

外の影響を一たん遮断したこうした空間は、静かで落ち着いた環境を提供している。そして庭を貫く通路は、カレッジの向こう外側に広がる風景を、想像しながら歩かせる導き手であるかのようだ。クレーターの場合、校舎をくぐると優雅な石橋がケム川にかかっていた。その両側に緑まばゆい芝生のキャンパスが広がっている。こんな美しい学び舎で過ごせる学生は幸せだろう。勉強は大変だが・・・。



2010年正月 珠江デルタの旅 1

広州の珠江のほとり

ここ数年、中国に行くことが多い。正月は、中国南部広州へと出かけた。広東省のほぼ中央を北から南に流れるのが、珠江。この大河は南シナ海へと注ぐ所に、大きなデルタ地帯を造る。そこには、アヘン戦争の史跡や香港・マカオの植民都市など、見るべき場所が多い。自身の関心で言えば、父が戦時中兵隊として駐屯した場所でもある。今回、広州から時計回りに東莞・深圳・香港・マカオと進み再び広州へと戻るコースをたどった。

さて着いた日の午後、ホテル前の珠江の護岸に出てみた。いかにも大陸の河で、流れはゆったりしている。アヘン戦争があった19世紀前半、この河を多くの船が河口から上ってきて、岸辺にたどり着き荷を上げ下げした。護岸は大そうな賑わいだったという。今はそのはたらきを外港に譲り、その面影は沙面(シャムン)と呼ぶ外国人居留地に残るのみとなっている。

今河畔に集まるのは、散歩する市民と観光客。物売りがライチーという果物を、ウイグル人の出稼ぎ者は羊肉を、焼いて売っていた。



2010年正月 珠江デルタの旅 2

地下鉄の駅で

ホテルは繁華街の中心「海珠広場」にあり、地下鉄2号線の駅と直結していた。広州は中国の成長を実感できる街だ。ここ数年、次々と地下鉄が開通している。ご覧の通り、新しい駅と新しい車両が目立つ。ホームには東京のメトロ南北線と同じガラスのホームドアが備わっている。こんな所にも、遅れて発展した国が一举に21世紀に突入している現実を感じる。

テレビでは年末に開通した5号線のニュースをやっていた。街の西を珠江が遮っている。対岸の仏山市の住民は渋滞する橋を渡るしかなく、大変な時間を無駄にしていた。それが地下鉄の開通で一举に解消したと言うのだ。喜ぶ市民が写っていた。仏山は広州ホンダの拠点である。この開通は邦人にも朗報だっただろう。

駅ではしばしば、おかしな光景を目撃した。いかにも地方から出てきたと思われる風采の上からぬ人たちが、切符を発売するコンピュータの前で戸惑っているのだ。不慣れた利用者を想定してか、至る所に案内とマナー向上のためのスタッフが配置されていた。写真のホームにも。



2010年正月 珠江デルタの旅 3

ペニンシュラホテル(半島酒家)

さて、いきなり香港である。ここまで来るのに、広東省の東莞市に寄りアヘン戦争で林則徐という義人がアヘンを没収して焼却した池や、イギリス艦隊と大砲でやり合った砲台の跡をバスに乗り訪ねた。中国の一地方都市と言うことで、街中で見つけたビジネスホテルは、一泊わずか3000円程。十分な備えだった。

翌日広東省で最も未来的な景観の深圳市を通り、香港に地下鉄で入境した。香港も中国だが一国二制度を採っており、政治の仕組みも使うお金の実力も相当違う。安ホテルなどあるはずもない。

地下鉄を九龍のネイザンロードで降りた。香港の都心である。一度は泊まってみたいペニンシュラ(Peninsula)に向かった。しかしフロントで料金を聞いて驚いた。シングルに4万円だと言う。この由緒あるホテルへの滞在はお預けとなった。

直ぐに行動した。隣に香港YMCAが経営するソールズベリーハウスがあった。部屋があり、一泊8000円。それで妥協した。部屋の広さは東莞の半分。しかし室内は清潔で洗練され、歓迎の果物まであった。



2010年正月 珠江デルタの旅 4

九龍の一角で

ホテルのある九龍は、香港島に面する海岸沿いのビジネス街などを除くと、至って気張らない庶民の街になる。香港になじみの10階以上ある高層アパートも、ここでは4,5階建てが混じっていたりする。いずれも高層階は住宅に、3階までは商店や事務所になっている例が多い。

この地を訪ねた訳は、今夏逝去した父が戦時中ここに駐屯していたと聞いたから。1941年、真珠湾攻撃から始まった太平洋戦争は、当時イギリス領だったここ香港でも、ほぼ同時に日本軍が進行した。広州市の白雲空港近くにおいて、それまで北方の内陸へと向かっていた父の部隊は、深圳の海岸沿いに南下。42年の正月までにはここ九龍を占領した。迫撃砲をロバに引かせての入城だった。その時接收して宿舎としたのが、幼稚園の建物だったと聞き、それらしい建物を探した。しかし見つからなかった。建物自体が残っているのかどうかさえわからなかった。父はここに一年いて、その後南洋ラバウルに向かった。広東では、あのライチーがおいしかったとよく言っていた。



2010年正月 珠江デルタの旅 5

聖ポール天主堂跡を望む

マカオは、街全体が世界遺産に指定されるほど、貴重な歴史地区となっている。世界史の授業で、ポルトガル人はアジアに進出し、1557年には中国からマカオを手に入れたと教えている。そのマカオに香港からジェット船でやって来た。

街で最も有名な場所が、写真の聖ポール天主堂跡を仰ぐ、階段広場だ。聖堂は17世紀初めにカトリックの修道会イエズス会の手によって建てられた。その時ポルトガル人だけでなく、長崎を追われた日本のキリシタンたちも建設を手伝った。しかし19世紀前半の火災であえなく焼失。建物の正面(ファード)だけが残った。

訪れた時、写真で見慣れたそのファードよりも、私はここにやって来る人の賑わいに感心した。この幅広の階段を上る人々は、地区の中心セナド広場から起伏のある道をぬうようにたどり、写真の先で突然広場に入る。そして階段をゆっくりと上る。振り返るとその小道をたどりながらやって来る人の列を見ることになる。それはまるで巡礼の道だった。

看板の咀香園の焼菓子ほうまかった！



2010年正月 珠江デルタの旅 6

聖オーガスティン広場

マカオ旧市街は歴史地区だけあって、見所が多くある。セナド広場と反対に緩やかな坂を上ると、劇場や幾つかの教会などが集まる一角にこの広場がある。小さい家が建て込んでいる街なので、こうした広場はマカオにとって貴重な、明るく広々とした空間だ。いつも清掃が行き届き、床に張られた敷石にも汚れを見ることがない。

写真の奥左手はクリスマスの飾り「プレゼビオ」だ。イエス=キリストが生まれたベトゥレヘムの馬小屋を模している(ちなみに6日の顕現節まではクリスマス)。その右手の擁壁には水色の模様があるタイルが貼られている。この辺りがポルトガル的なのか。清潔感にあふれている。そして母国でも同じだろうが、夏の涼として端正な形の噴水が備わっている。

ポルトガル人は、祖国の都リスボンを意識してこの街を築いたという。そして今、住民の大半は広東の中国系の人々だ。西洋の広場にアジア系の人々。何かミスマッチだが、いやいやすっきり当たり前の暮らしになっている。



2010年正月 珠江デルタの旅 7

ザヴィエル(Xavier)の骨

イエズス会士の F. ザヴィエルは 1549 年に日本の鹿児島にやって来た。日本をキリスト教国にすると言う大胆な野望を持って。しかし、京に上り幕府に願っても、非力な足利将軍ではそれをかなえることはできなかった。わずかに大分の大友宗麟など、一部の大名に洗礼を授けることになった。

出直すことにした。インドのゴアに戻り、今度は中国布教に向かった。ここマカオに近い舟山列島、上川島に潜伏した。鎖国だった中国の明に布教するため、入国の機会を待った。1552年のことだ。しかしこの地で病をわずらい、客死した。その亡骸から分けた上腕骨が、ここマカオの聖ヨゼフ聖堂内に安置されている。

上智大学の H. チースリク教授が、本に書いていた。「ザヴィエルは情熱の人ではあった。しかし冷静に遂行する組織者ではなかった」と。しかし、彼のまいた種は確実に実って行く。日本には、戦国から江戸の初め、キリシタンが大いに活躍した。その教えは鎖国になっても秘かに語り継がれていった。



10年夏、北海道にて1

利尻空港と利尻山



10年夏、北海道にて2

利尻から見た夕暮れの礼文島



10年夏、北海道にて3

利尻山頂下のローソク岩